
駅から見える街

後藤正人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

駅から見える街

【Nコード】

N8903M

【作者名】

後藤正人

【あらすじ】

旅に出ませんか。それは計画を立てて、お金を積み立てるだけ、そんな大それたものではありません。ほんの少し、自分の知らない場所に足を伸ばしてみるだけのこと。電車に乗って外の光景を覗き見る時、貴方は思いませんか。ここから見えているのは街のほんの一部でしかなくて、見えない場所にはどんな光景が広がっているのかと。いい旅になることでしょう。見慣れた街でさえ、貴方はそのすべてを知らないのですから。

私は旅に出ることにいたしました。

旅と言ってもそんな大それたことを考えてはおりません。ただ自分の知らない場所を見たくなったのでございます。

それは大学2年の夏のことでありました。新しい生活にも慣れ、私は暇を持て余していました。何か変わったことをしてみたかったです。

それが旅をするということでした。ですが、遠出をするようなお金はございません。それならと私は、普段通学のために素通りするだけの駅、S駅とても申しましよう、ここで降りてみることにしたのであります。

安上がりで、それでいて普段見たことのないものを見たい。それは何でもいいのです。いつも生活している場所とは異なる風景であれば何でもいいのです。

たとえば、私はライオンという生き物を見たことがございません。もちろん、テレビや写真では目にしたことはございます。ですが、実物を、実際にあんな大きなネコが生きて歩いている姿を見たことがないので。

海外旅行には縁のない暮らしをいたしております。動物園には行ったことがございません。

いると言われているから、いる。そんな、他の方々の知識に頼った認識ではないのです。

皆様の中にはライオンを見たことがあると言われる方もいることと思います。ですが私にとってライオンとは、実在を証明されていない絵や文字の中存在にすぎないのでございます。

電車の中からでは、街並みはどこまでも続くように見えました。ですが、私が見えている街はほんのごく一部に過ぎません。ビルに遮られ、視界から外れてしまう場所がなんと多いこと。

今日はそんな、当然存在してしかるべき、しかし、まだ私が確認してこのない場所を眺めることにしたのです。

S 駅は人が多く、平日でも人波が絶えません。急に1人、2人いなくなっても誰も気づくことはできないのではないのでしょうか。私はそんな雑踏に混ざって街へと歩き出しました。駅前の広間を抜けると信号があります。幸い、信号はすぐに変わってくれました。

広い街です。ただ、同時に汚らしさも覚えてしまいます。生まれつき喉の弱い私は、たばこの煙をとても苦手としています。吸い殻が道に捨てられているのを目にすると、どうしても嫌悪感が顔を出してしまうのです。

歩きたばこをしている人も多く、私は自然と人を避け、細い道、人の少ない場所を選ぶようになりました。

元々当てのない旅です。それはさしたる問題ではありません。

ただ、人の少ない場所を歩くと、どうしても聞こえてくるのです。私にしか聞こえませんが、幻聴ではございません。私は幼い頃中耳炎を患ってしまいました。完治はいたしましたが、それから耳鳴りが時折聞こえてくるようになりました。

何と言いましよう。耳の中で象が足踏みをしているような、そんな音が聞こえてくるのです。ずっしりとしていて、輪を描いて音が広がっていくような音が聞こえてくるのです。

耳鳴りを1度でも耳にされたことのある方でしたら、私の言わんとしている音をご理解いただけるものと思います。

そんな耳鳴りも、慣れてしまえば何のことはございません。この旅の唯一の連れとして共に参ることにいたしました。

この耳鳴りは不思議なもので、日の光が遮られるような路地の中では大きく聞こえ、人の姿があるような通りでは途端に聞こえなくなるのです。かと思うと、ふいに、まるですれ違うように、聞こえたと思った時には聞こえなくなることもあるのです。

駅から、2、30分も歩いた頃でしょうか。駅周辺にいたたくさんの人まばらになってしまいました。ここからでは駅を伺うこと

はできません。それは、駅からここを見ることもできないということです。

もうここは、普段私が目にしている場所からはかけ離れた、非日常の場所であるのです。

そこはなだらかな上り坂になっていて、地面にはタイルが敷き詰められていました。残念ながら、特に物珍しい光景というほどではございませんが、確かに旅の目的とする場所であるのです。

通学というごくありふれた日常からでは決して見えることのない世界へ、私はたどり着くことができたのです。

ここは珍しくはなくとも不思議な場所でした。

駅には数え切れないほどの人がいたのに、ここには数えるほどの人しかいません。では、減ってしまった人はどこへ消えてしまったのでしょうか。

また、耳鳴りが聞こえます。人がいるところでは出てこない、何とも恥ずかしがり屋な耳鳴りです。

私はもう少し、坂を上ってみることにしました。

夏だというのに気温は決して高くなく、ビルの林が日光を遮って風に吹かれると肌寒さまで覚えるほどです。

やがて私は突き当たりに差し掛かりました。坂を上りきった所で、T字路になっていたのです。目の前には壁のようにビルが並んでいきます。

ありきたりなビルで、どこにでもありそうなものでしかありません。私自身、どうしてもそんなものに興味を抱いたのかわかりません。ただ、どうしても注目せざるを得なかったのです。

興味はありましたが、勝手に入ってしまうば不法侵入です。また、立ち入りを許される正当な理由も有していません。

私は仕方なく、外から眺めている他ありませんでした。

すると、ビルとビルの間に、人1人が通れるほどの路地を見つけることができました。敷地内ではあっても、建物の中に入るわけではない。こんな自分に都合のよい理屈をつけて、私は路地へと入り

ました。

普段誰かに使われているようなものではないのでしょうか。暗く、屋外器の熱風か、蒸し暑くさえ感じました。床にはブロックの破片のようなものが散乱し、とてもではありませんが、快適な踏み心地とは言えませんが。倒れても危ないので、私は壁に手を突いて奥へ奥へと進みました。

奥は薄暗く、何があるようには見えません。

やがて私は知ることになるのです。そこには、事実として何も無いのだと。

それは、壁についた手から、壁の感触が失われた時のことでした。私は赤い砂と黒い石が転がる荒野に立っていたのです。

一瞬意味がわかりませんでした。何が起きたのか。SFのように瞬間移動をしたのだとか、魔法や超能力にでも巻き込まれてしまったのではないか。

こんな荒唐無稽なことを並べでもしなければ説明がつかないので。

私はすぐに後ろを振り向きしました。

そこには、壁をきれいに切り払われたかのようにビルがむき出しになった内部をさらけ出していました。

まるで2つの世界をそれぞれナイフで切り取って、無理に繋ぎ合わせたような異様な光景でありました。

こちら側の世界は太陽がなく薄暗い。また、誰かが一度口に含んだ息を吹きかけられるような、ぬめつとした、生暖かい空気が満ちていました。

それに、青空はありません。夜とも言いがたいのです。空には普段見慣れた月の何倍もあるような青い天体が3つ、光もせず、薄暗い、それでもはつきりと見えてしまうのです。暗いはずなのに、見えないはずなのに見えてしまうのです。

ここが地球上のどこかとは考えられません。何もかもがあまりに異質で、地球とはかけ離れているのです。もちろん、私は地球のす

べてを知り尽くしているわけではありません。

それでも、この風吹きすさぶ音のすることが地球上のどこでもあり得ないということを、みなさんに肯定していただく自信はあるのです。

私はその時、混乱していたのだと思います。ついこの世界のこと
が知りたくなり、歩きだしてしまつたのです。やめておけばよかつた。そんな冷静な判断はいつだって取り返しのつかない事態になるまで私を引き留めてはくれないのです。

赤い砂は、どれほど強く踏みつけても、どんな音も立てることはありませんでした。砂の粒子同士が擦れ合う音も、足を受け止める音も聞こえることはありません。

聞こえる音は、風の吹く音と、耳鳴りしかありません。どちらもそろそろ耳障りに感じてしまうほど強く、私を苛立たせました。

この世界の光景はあえてたとえたとすれば砂漠でしょう。赤い砂。黒い石は、時に岩の大きさをして転がっては丘を形作っていました。この黒い岩をよく眺めると、まるで刺し傷のような亀裂が走り、そこから地面に敷き詰められる赤い砂が噴き出していました。岩が傷つくと血の代わりに砂を流すのではないか。

どなたか、私のこんな馬鹿げた推測を大いに否定していただきたい。ただ、そうとしか考えようがないほど、それは不気味で、赤い体液を思わせて噴き出していたのです。

見えないはずの星。音を立てない砂。血を流す岩。

どれも途方もないほど悪趣味で、世界が本当に創造主の手で創られたのだとしたら、その正気さえ疑いたくなるほど狂つた世界であつたのです。

また、風の音が聞こえます。

その時になつて私はようやく気づくことができました。この世界に風は吹いていないのです。少なくとも、私の頬を撫でるものはない。舞い上がる砂もありません。

それでも、まるで嵐でも近いような風の音が聞こえてしまうので

す。見えない風が聞こえてしまうのです。

耳鳴りはひどくなる一方でした。徐々に聞こえてくる音が大きくなり、それはまるで、足音が近づいてくるかのようでした。

私の噴飯ものの考えは、残念ながら間違っていてはくれませんでした。

風などではなかったのです。耳鳴りではなかったのです。

それは象のような足音を響かせて訪れました。

それが地球上のどの進化の流れにも乗っていないことなど、生物学の権威でなくともわかります。あまりに異形であつたからです。

体は細長く、どこか蛇を思わせます。しかし、足のような器官を有していて、その頭は私の遙か頭上、5 mほどの高さにありました。皆様は、画家であるムンクが描いた「叫び」という著名な絵画をご存じでしょうか。虚ろなほどに白目を強調した両目に、あまりに細く引き延ばされた口。もはや人であるのかないのか、そんな境界にあるような異形の顔に思えました。

この怪物には、まるでその叫びをそのまま張り付けたような白い鱗でびっしりと覆われていたのです。鱗の目は何も見てはおらず、口からは息が漏れて、例の風の音を演出していました。

体中から叫びの風を吐き出す怪物の顔に当たる部分では、一際大きな叫びが顔の役割を果たしていました。大きく開かれた口の中から赤黒い粘液が垂れています。

怪物は、何を思ったのか、突然頭を地面へと叩きつけました。すると、これまで音がしなかった砂が突如として大きな音を立てました。

それは、耳鳴りとして聞こえた、あの足音と同じものでした。

続いて、怪物は足を動かしました。体に不釣り合いほどに太いそれは、やはり叫びを鱗ように貼り付けています。足の甲なんてものではなく、丸太のような足の先端はただ丸くなっているだけでした。

その足が砂を叩くと、やはり、あの足音がするのです。

もう片方の足が前へと出されると、同じ足音がして、首が不気味

に揺れながらまた、私の頭上へと掲げられました。赤黒い唾液がばらまかれ、肉が腐ったような生臭い臭いが広がります。

私は思わず後ずさりしました。それが、適切な判断であり、そして幸運であつたとわかるのは直後のことでした。

怪物が鎌首をもたげて、その叫びの顔を私が先程までいた場所に振り降ろしたのです。いささか語弊がございましたが、大きな足音が響きました。

この怪物は私を押し潰そうとしたのでしょうか。それ見当違いな判断であるということはすぐにわかりました。

砂に水を混ぜてこねまわしているような音。それは怪物が咀嚼しているの音なのです。

潰されるわけではありません。怪物は私を喰らおうとしたのです。

ゆっくりと首が持ち上げられると、口の周りには赤い砂がこびりつき、赤黒い唾液が腐臭を放って垂れていました。白濁した怪物の眼には、怯える私の姿が深く、深く映り込んでいました。

それから、私は逃げ出しました。どのように逃げたかについてはあまり覚えていません。ただ、とにかく必死であつたことくらいでしたら、辛うじて思い出すことができます。

そしてもう一つ。私が逃げ帰ることができたことだけは確かです。そうでなければ、私がこうしてお話する機会に恵まれるはずがありません。

あれ以来、私はいつもと決まった道しか使うことはなくなりました。ちよつとした興味で普段とは違うことをしなくなったのです。

私には、S 駅のおそこだけがあの世界に繋がっているとはどうしても思えなかったのです。

私は住んでいる街の地図を買ってきて、普段通る道を赤くなぞり、それから、左右見えると思われる範囲、大体50mほどを塗りつぶしてみました。この赤い範囲が、普段私が目にしている範囲であることになります。

すると、住み慣れた街であるはずが、私が一度も目にしたこと

ない場所のなんと多いこと。

私は街を、世界を知っているようでいて、それらのほんの一部しか目にしていなかったのです。

もしかすると、私が普段目にしている世界の他は、あの赤い砂漠が延々と広がり、あの怪物が蔓延っているのではないかと思えてしまうのです。

この世界は私のために用意された、それとも誰かのために用意された世界に偶然私の生活範囲が重なっているだけなのでしょうか。

だから私にはわからないのです。どこからどこまでが街で、一体どこで砂漠がその姿を現すのか。

皆様が、仮に赤い砂漠にご興味を抱かれたとしても、決して探そうとはなさらないでください。

あそこは人が踏み入っていい場所ではありません。黒い石から噴き出した砂で満たされた狂気の住まう場所なのです。

あなたが世界の姿を、街がどこまでも続いているようだと確信できている内は、決して砂漠を目にすることはないでしょう。

しかし、努々お忘れにはならないで。

目にはしていても一度も入ったことのない路地はあなたの街にはありませんか。

道からではどうしても死角に入る場所に心当たりはございませんか。

または、一度も開けたことのない扉がどうしても気になったことは。

そこには暗い星に見下ろされた砂漠が広がっているかもしれないのです。

私には砂漠に通じる場所が1カ所だとは到底思えません。

もしそんな馬鹿げた世界なんて存在しないと一蹴される貴方、では貴方は世界をすべてを知っていますか。住み慣れた街でさえ見知らぬ場所はあるでしょう。一度も立ち入ったことのない場所はありませんか。

貴方が目にしている光景などほんの一握りに過ぎません。氷山の一角を覗いて世界のあり方を勝手に想像しているに過ぎないのです。もしかしたら世界の本当の姿は赤い砂漠でしかないのかもしれない。私たちが世界だと信じている場所は、赤い砂漠に浮んでいるだけなのかもしれません。

叫びの蛇は待っているでしょう。私のように日常から外れたいという好奇心や、あるいは不注意、またはそれ以外の何かでもって街の枠から外れ落ちる獲物を。その歪な足音を響かせて。

努々忘れないでください。あなたが実在を信じるものは、所詮、誰が証明したものでなくて、そして、あなたさえ1度も確かめたことのないものでしかないということを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8903m/>

駅から見える街

2010年10月8日11時44分発行